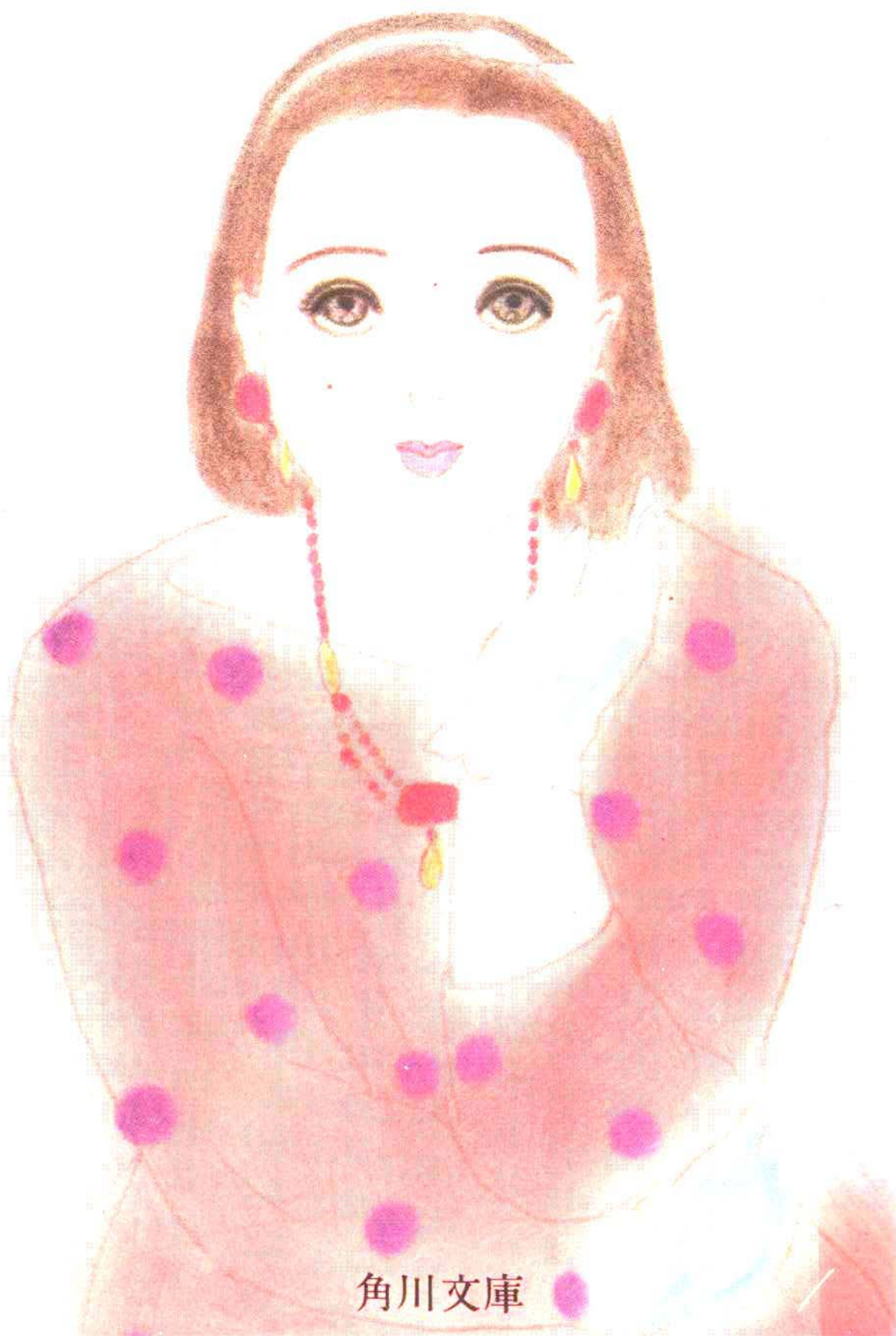


いっしょにお茶を

田辺聖子



角川文庫

いっしょにお茶を^{ちや}

たなべせいこ
田辺聖子



角川文庫 5880

昭和五十九年十月十日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

編集部(〇三)二三八―八四五―

電話 営業部(〇三)二三八―八五二―

〒〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——千曲堂製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

いっしょにお茶を

田辺聖子



角川文庫 5880

目 次

いっしょにお茶を

宝塚歌劇への誘い^{タカラヅカ いぎな}

書くことへの誘い

友情への誘い

ハチャメチャについて

おしゃべりの楽しみ

コレクションのたのしみ

愛想よさということ

手紙のすすめ

名を知るよろこび

ひとあじちがう人生

歴史のたのしみ

キライな人とつきあう法

ささやかな日々の楽しみ

花をたのしむ

一三七

曇の中の四季

一四三

あじさい抄

一四四

秋・入り日・小説

一四九

更年期の酒

一五四

上方に住むということ

一六二

大阪のうどん

一六六

スヌーの電話

一六九

中年よ「命みじかし」ナツメロを放歌高吟スベシ

一七四

カモカ連てんまつ記

一八〇

女・男・幸福

女のイイ顔

一九二

神戸の女性たち

一九六

可愛い女からいい女へ

二〇二

男の可愛げがわかりますか

二二二

夫の生き方妻の生き方

二三

女・結婚・幸福

二三

わが家の正月風景

二七

ホメ合い結婚

二八

あとがき

二五

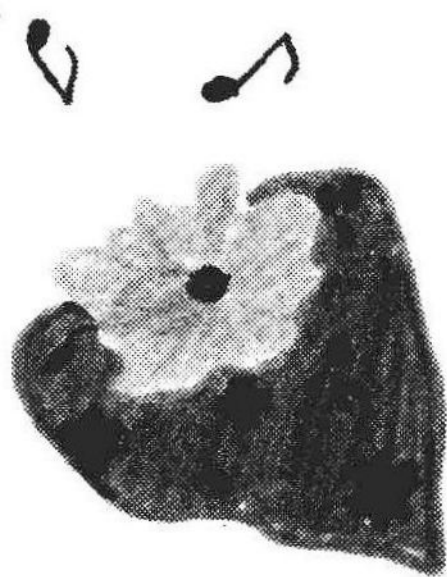
解説

熊井明子 二四

カット
本くに子

いっしょにお茶を

タカラヅカ
宝塚歌劇への誘い



実は何をかくそう、私はこの原稿を東京の山の上ホテルで書いているのである。なんで東京へ来たかというと、宝塚歌劇の初日のためである。私の「新源氏物語」を宝塚の月組が上演してくれているので、一週間ばかり、この定宿に泊りこんでいるというわけ、在阪の作家の中にもわりによく東京にいらっしゃるかたもあるが、私は出不精で、めったに東京へ出ないのである。

東京に出るのは、年に一、二回、一年を通じても五、六日くらいであろうか。一週間も、東京に滞在してるなんて、私としては破格のことである。

で、そのあいだ日比谷の東京宝塚劇場へ通いづめに通っているのだが、それも、ここへ人を招いて、「タカラヅカ」の魅力を再認識してもらおうというか、開眼してもらおうというか、そのためなのである。とにかく私は、

「宝塚を見てくれなきゃ、原稿書かないわ」

と担当編集者たちに宣言してるのである。

私の係りの編集者の方々は、大恐慌をきたしていられるにちがいない。

夏になると「カモカ連」という連を結成して阿波おどりに行かされるし、私の原作が宝塚で上演されると、見ることを強要されるし……お気の毒のいたり。

でもそれをあえてするのは、阿波おどりの話は別にするとして、宝塚というスバラシイものを見ないでは、何だか人生の損失、という気がするからである。それで身銭を切ってお招きするわけである。

私は三年前に「隼別^{はやぶさわけ} 王子の叛乱^{はんらん}」を宝塚の月組に、二年前に「舞え舞え蝸牛^{かたつむり}」を花組に上演してもらった。今度で三度目であるが、なにがしかの原作料を宝塚歌劇団から頂くので、それをみなはたいて切符を買い、編集者たちに「観て下さい」と強要するわけである。べつに宝塚にたのまれたわけではなく、私が好きでやってることとで、「宝塚で儲けようと思いませんから、頂いた原作料は宝塚へお返しします」と冗談をいってるのだが、

（こんなイイモノを知らずに一生をすごし、そのまま死ぬなんて、勿体ない……）
と私は心の中でいつも思う。それで宝塚に無縁の人に、そのたのしみのキッカケを作ろうと
している。

タカラヅカは、中学生・高校生のキーキーキャーキャーと熱狂するもの、女こどものもてあ
そびもの、という先入観念が抜きがたくあるせいか、男性編集者たちは私にタカラヅカの券を
押しつけられると、

「うーむ」

と苦悩の色をアリアリと浮べる。そして冷汗をぬぐい、

「家内は小さいころ一時、凝ったそうです。家内に頂いてはいけなんでしょうか」
などと逃げようとする。

「あ、奥さまには別に、昼間のほうの券をさし上げます。夜はアナタ、絶対、来て下さい。
でないともう、オタクの雑誌には書かないし、買わないし、読まないわよ」
と私は恫喝する。

「いや、しかし、その、男は居ないでしょう、何千人の女性観客の中に男は僕一人、という
のでありますと、せつないです」

「そんなことはありません。この頃の宝塚は男の人もたくさん観にきます。それに、まわり

に男性編集者を固めときますから、大丈夫です」

と私はなぐさめたり、励ましたりして、宝塚へ首に縄をつけて引っぱりこむ。私の原作が上演されるときは、かくして、いつも、数十人の男性がむりやりに動員される。

編集者たちは、会社のためには一身を犠牲にせねばならぬと悲愴^{ひそう}な覚悟をし、内心、身悶^{みもた}えする思いでタカラヅカを観るのであるが、終って出てくると、意外にハレバレとして、

「いやー、あんなものとは思いませんでした、すごいもんでした」

とビックリするのである。「あんなもの」というのは、女こどもの愛玩^{あいがん}するものだから、幼稚で齒が浮くように甘くて、子供だましの学芸会のようなものだろうと想像したところ（それは草創期の大正はじめのころはそうであったが）、現在の宝塚歌劇は充分、オトナの鑑賞に耐えるだけの実力をもちはじめていたのでそれに驚いた、ということであろう。七十年の蓄積、というのはいへんなものである。宝塚歌劇団というのはわりにおっとりしていて、そのへんのPRにあまり熱心ではないが、

「オトナが楽しむ宝塚」

というキャッチフレーズで、熟年層観客を開拓すべきだと私はひそかに思っている。事実、私が首に縄をつけてひっぱって行って気の毒でもあった男性がたは、それ以後、

「やっぱり大変なもんです、タカラヅカというのは。楽しめました」

というようになっていく。それから私の担当の女性編集者たち——熟年世代のキャリアウーマンで、目も耳も肥えてる人たち、つまり人生の美食家である女性たちが、私にむりやりタカラヅカを見せられて以来、熱狂してしまい、私よりヅカ狂いになって、

「貰^{もら}った病いは重い、というけれど……こんなになるなんて」

と私をびっくりさせる。少女のころ、とり憑^つかれていて、オトナになって遠ざかり、またUターンした人、あるいは人生で歳にしてはじめて接した人を強く惹^ひきこむ、それだけの力を宝塚歌劇というのは持っている。

ところで私は、男性や、仕事をもった女性もさりながら、「タカラヅカ」のたのしみをいちばんおすすめしたいのは主婦のかたちたちである。私は主婦ほど、いろんなたのしみを持たなければいけない種族はない、と思っている。家のなかでとじこもり勝ち、変化のない生活（家庭があまり変化すると家族はくつろげない。いつも同じように、どっしりと包みこんでくれる、という安心感が、家族の帰宅の足をかるくする。しかしその安心感をもたらすところの主婦にとって、それがまた主婦自身をむしろマンネリになる）——その中で、いつもイキイキしているには、ということはないそうむつかしいことであるが、また、世の中でいちばん必要なことだ、と私はかたく信じている。

だって、女性が心から楽しんで生きていない社会は、どんなに繁栄してみえても、それはい

びつで偏った社会で、土台は脆いんだもの。社会の土台を支えるのは女たちだもの。女が心から（面白いわ。シアワセだわ。楽しいわ）と満足のタメイキをつくとき、その幸福感の余韻は周囲を静かにどよもし、よい薫りをはなち、社会全体に活力をもたらす。男や子供たちは、女たちに愛されていきいきとよみがえる。愛と幸福感は照り映えあって、女たちはまた、男や子供に愛されることで充実する。

実際、私は、この世の中でどれほど楽しみをみつけれ得るかということが、女のかしこさの都合だと、この頃つくづく思うようになっていく。

そしてそれは、自分にどれだけ美味しいご馳走を食べさせてやるか、ということである。

主婦は家族にそれを与えるが、自分自身のことはあとまわしになる。供給源が枯渇しては何にもならない。社会や家族の土台を支える人は、いちばん「楽しみ」が多くないといけない。

というわけで、私はこの章で、女の楽しみについて考えて、何がしかのヒントになればいい、と思っているのだけれど……。

女の楽しみの中へ、私がまず指を折りたいのが、

「タカラヅカ」

ということ。少女のころ熱中して、それ以後ご無沙汰している人も、今まで全く無縁の人も、ごく気軽にいっぺんのぞいてみられるといいと思う。

私は伊丹^{いたみ}に住み、本場の宝塚大劇場にちかくなったので、だしものが変るごとにいくけれど、そのとき知人友人の主婦に声をかけて誘ってゆく。

忙しい「奥さん業」の人たちが、その日は何をおいてもおしゃれしてやってくる。東京の日比谷の東京宝塚劇場は劇場を出るとすぐ町の雑踏になるので、おしゃれを楽しむ余裕はないが、宝塚の本家の大劇場は、一大遊園地のその中にあり、広大なロビーがあるので、東京よりずっと好き放題のおしゃれを楽しめて、お互いに鑑賞し合うという面白さもある。

いろんな文化講座を聞くのも女のたのしみの中へかぞえていいだろうけど、月に一度、きちんとお化粧をして髪をととのえ、たとえ服は新調できなくても、スカーフとかブローチとか、ストッキングの新しいのでもよい、おろしたてを身に着けて、劇場へかよう楽しみはことさらなるものである。

さてそうやって来た主婦たちが宝塚歌劇を見て、その美しさと楽しさにしばし、ボーと酩酊^{めいてい}して、帰ると家族に対して、

「いんから、優しくなれるわ」

と笑っていた。また、

「しかもそれが、ひと月ぐらい保つのよねえ……」

ということである。私は、人生は「ダメしダメし保ってゆく」のがよい、とかねて考えてい